

きたのだ
北野田遺跡 範囲確認調査

所在地 豊田市蕪木町北野田地内
(北緯 35 度 1 分 32 秒、
東経 137 度 17 分 13 秒)

調査理由 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成
事業

調査期間 平成 26 年 5 月、平成 26 年 7 月

調査面積 100 m²

担当者 鵜飼雅弘・橋本昇・三輪みなみ

調査の経過 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成事業に伴う範囲確認調査として、愛知県企業庁より委託を受けて実施した。



調査地点 (国土地理院 1/2.5 万「東大沼」)

立地と環境 調査対象地は、西に開口し蕪木川支流に流れ込む谷及び周辺の緩斜面に立地する。調査前の状況は、耕作地及び山林であり、耕作地は段差を設けて造成されている。標高は海拔 360～372m である。

調査の概要 試掘坑は、当初 50 m² の予定で 5 月に調査を行ったが、調査成果では遺跡範囲を確定する根拠に乏しかったため、7 月に新たに 50 m² の試掘坑を設定し、都合 100 m² を調査した。その結果、次に述べる 3 地点で遺構の検出、遺物の出土がみられた。

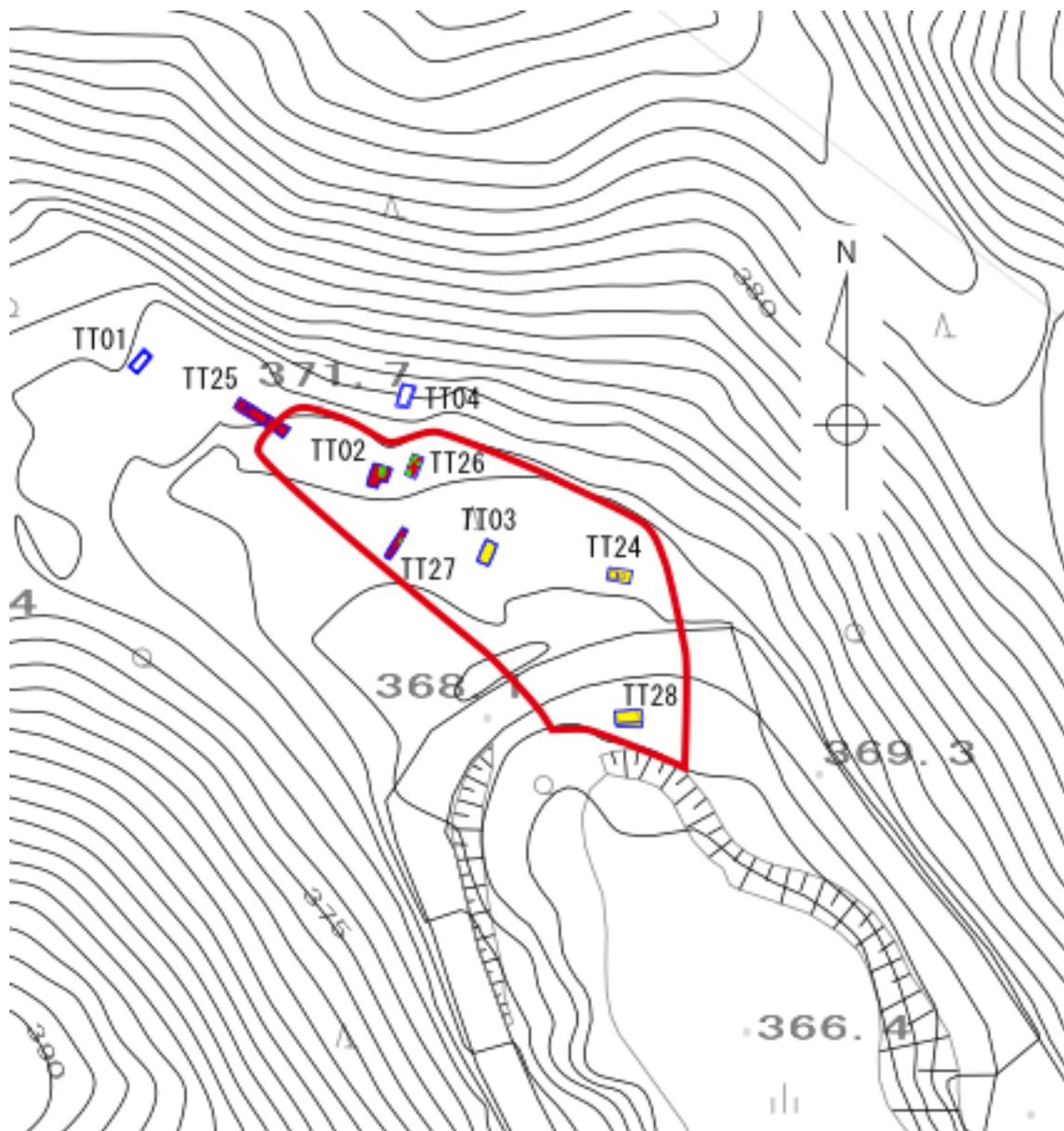
調査対象地北東の平坦地では、TT02・TT06・TT07 の 3 カ所で土坑・ピットを検出した。いずれも炭化物を含む暗灰黄色土を埋土とし、包含層からは山茶碗が出土した。また、TT08 では谷の堆積土から山茶碗が出土した。

旧耕作地では、TT09・TT11・TT15・TT17 の 4 カ所で、谷の堆積を検出した。このうち TT17 の暗灰黄色土からは、山茶碗・漆椀・木製品が出土した。暗灰黄色土は TT15 などでも確認され、遺物包含層の可能性が高い。また、TT09 では近世以降の構築と考えられる護岸施設を検出した。谷に面した南向き斜面では、TT22 で土坑 2 基を検出し、TT29 のトレンチ南端の褐色土から、縄文土器、石器 (スクレイパー) が出土した。

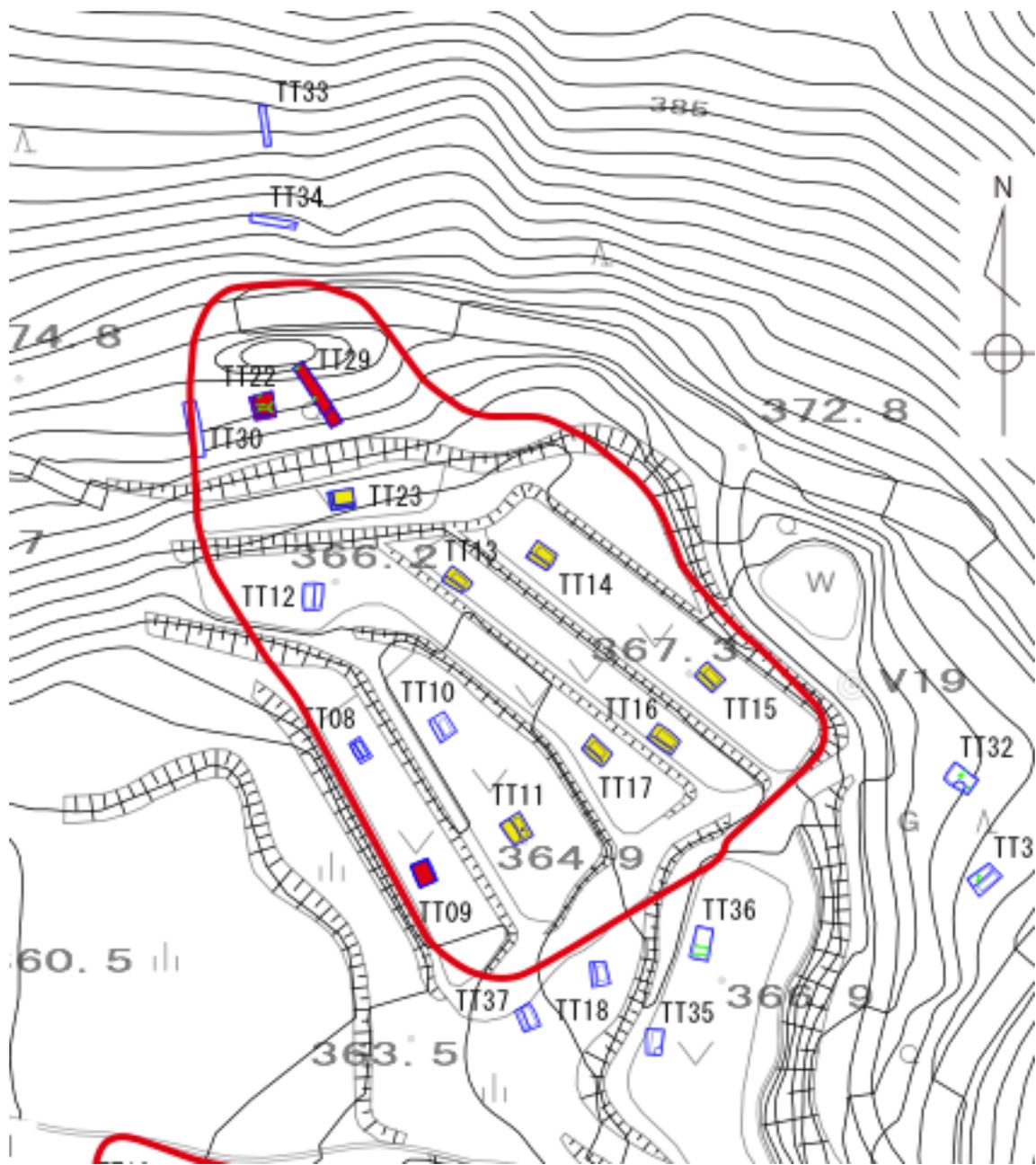
北向きに開口した谷地形では、TT21・TT38 で谷の堆積状況を確認し、TT21 最下層の灰色土からは、山茶碗・常滑系甕の破片が出土した。また、TT39 では土坑 1 基、TT43 では焼土・炭化物を含む土坑 1 基を検出した。

まとめ 上記のとおり、調査対象地北東の平坦面、西に開口する谷及び周辺の緩斜面、北向きに開口した谷地形の 3 カ所で、遺跡の残存する可能性が高いことが判明した。出土遺物からは、中世が中心となると考えられるが、場所によっては縄文時代の活動が想定される。また、北東の平坦面ではピットが多数検出されており、建物跡が残る可能性がある。

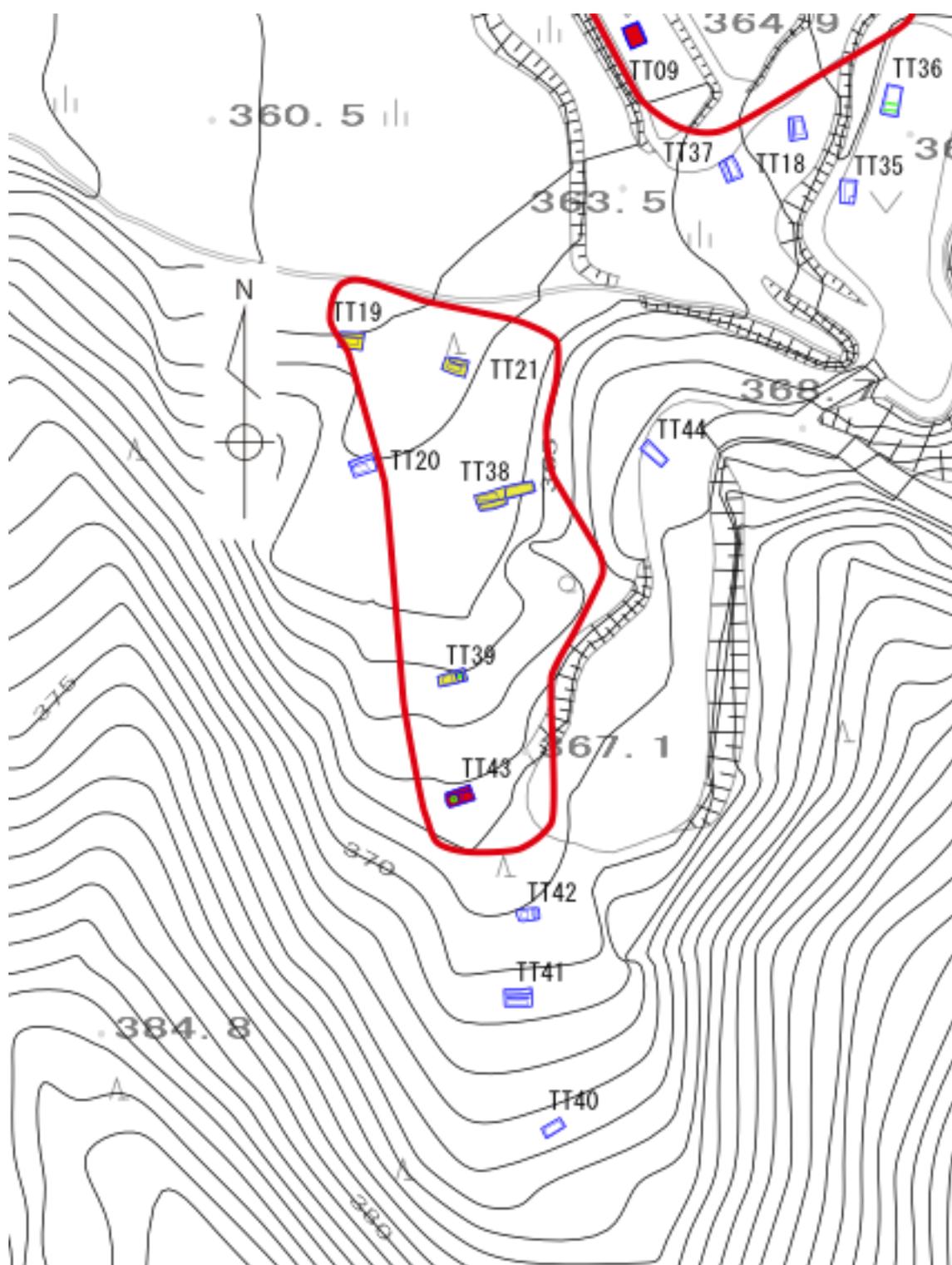
(鵜飼雅弘)



遺跡北東の平坦地 遺跡範囲 (S=1:1,000)



旧耕作地 遺跡範囲 (S=1:1,000)



南の谷地形 遺跡範囲 (S=1:1,000)



北野田遺跡調査前状況（北から）



拡張区調査前状況（南東から）



TT26 遺構検出状況



TT26 ピット半裁



TT22 遺構検出状況



TT29 全景（南東から）



TT29 出土石器（スクレイパー）



TT43 全景（北から）

(2) 調査の成果

今年度各遺跡の調査で検出した遺構及び出土遺物は、縄文時代、弥生時代、古代、中世、近世以降に集約される。

① 縄文時代

孫田遺跡では調査区東の平坦部、埋没した谷の堆積から爪形文や押型文をもつ土器の小片が出土した。遺構の検出がなく、土砂などとともに流入した可能性が高いが、隣接する鶴ヶ池遺跡・栗狭間遺跡の成果と比較することが必要になろう。

② 弥生時代

丸山 B 遺跡で弥生時代中期、丸山 C 遺跡で弥生時代初頭の遺構・遺物が確認された。これらの成果に加え、オンボ B 遺跡で出土した細頸壺については、今後、下山地区での弥生時代の様相について検討する好材料となりうる。

③ 古代

丸山 D 遺跡、孫田遺跡、引地上切 A 遺跡、引地上切 C 遺跡、オンボ A 遺跡では竪穴建物とみられる遺構が検出された。中でも丸山 D 遺跡は尾根の頂部で延べ 6 棟を検出し、遺構内から石囲いの炉跡も検出された。

各遺跡で出土した灰釉陶器の多くは、猿投窯黒笹 90 号窯式から折戸 53 号窯式に相当する。また、灰釉陶器の椀・皿の底部に墨書を施す資料が多数見られ、緑釉陶器も少量ながら見られる。

④ 中世

引地上切 A 遺跡、引地上切 C 遺跡では、掘立柱建物が検出された。両遺跡では湧水を利用した井戸や自然流路の付け替えなども検出された。オンボ B 遺跡の下段では、盛土を施して平場を確保した上で、土坑などを構築したことが明らかになった。オンボ A 遺跡、引地上切 B 遺跡などでも斜面を切り盛りして平坦面を確保する作業の様相が明らかになった。

これら遺跡については、中世の開発の在り方を示す遺構が検出されたことも、特色として挙げることができる。

⑤ 近世・近代

出土した遺物量は少ないが、炭焼窯や土坑についての知見が増加した。とりわけ炭焼窯は、限られた範囲で繰り返し窯を構築する様相が明らかになった。

(鶴飼 雅弘)